

金塊によせて

徳永重元 (元所員 パリノ・サーヴェイ株式会社)
Sigemoto TOKUNAGA

わが国では 金鉱床地帯においても 自然金の塊が産出するのは 非常に珍しいことであると聞いている。

表紙の写真の自然金塊は 明治37年に宮城県気仙沼市(現在) に所在する鹿折金山から産出したものである。

明治37年といえば 日露戦争の真只中であるが 当時この鉱山は 薩摩藩ゆかりの人々によって経営されていたといわれ 偶々地質学を学んだ亡父徳永重康は 故郷が鹿児島ということもあって 鉱山の技術的な運営をまかされていた。 この金塊の発見の模様を 昭和14年5月に刊行された「徳永先生記念論文集」の中で 自らつぎのように記している。

「明治37年当時 私の関係していた鹿折鉱山に滞在中 私は計らずも金の“大直り”を発見した。 大部分がほとんど自然金の塊と称して差支えない程集合していて 当時の価格で10万円を得た。 砂金は別として 山金でかような大金塊を見出したことは 佐渡金山の昔話はいざ知らず 日本否外国でも未曾有の記録であり 将来にも稀と信ずる。

ただしこれは学問上の標本としてのことである。 この金塊の極一小部分を 私は Monster と自称して



徳永重康
1878 - 1940 (明治7年~昭和15年)
元早稲田大学理工学部探鉱冶金科教授 (地質学)

保存しておいた。 この一小塊の記録は 岩崎重三君の「金」という書籍に書残されている。

古生物には関係のないことであるが 稀有の金塊を私が見出したことなど 私の一生には妙な運命のめぐりあわせがあるものだ。」

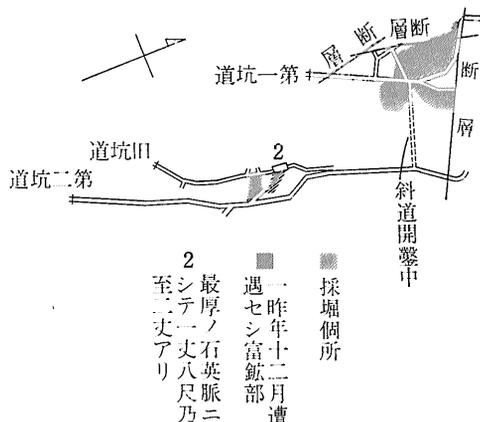
こうしてみると 写真の金塊はその極一小部分にすぎないということになり 本体がいかにか大きかったか想像に難くない。 それならばその産状はどうであつたらうか。

明治38年7月に刊行された 農商務省地質調査所の地質要報 第18巻 第1号にこれに関する報文が載っていることを知らされ 調べた結果鉱床の状況が明らかになった。 当時の鈴木敏技師の報文を 原文に忠実に要約すれば つぎの通りである。

「鹿折金山は 気仙沼町(当時) の北方約10kmに所在し 鉱区は鹿折・矢作両村(当時) にまたがる。 鉱区周辺は 昔から採金事業の盛んな所で 記録によれば慶長の頃伊達政宗が発見し 天明2年(1783)にいたるまでは歴代奉行をおき 盛んに稼行されたことは明らかだが その後何時中止したかは不明である。

明治33年中村某探掘特許を得て稼行したが 旧坑の一部を開採しただけで中止した。 さらに一昨年(明治36年) 5月 現鉱業人徳永某他1名の手に帰した。

第一圖
鹿折金山坑内断面略圖
縮尺五千分の一



以来 昔仙^{マスコチ}台侯に多くの金塊を上納したと伝えられる白石と升内金山の旧坑地に鉱区を拡げた。

その後鋭意 探鉱・採鉱に努めた結果 極めて好成果をあげたが 銀と金の割合は2：8～3：7であった。しかし当時の収金法では 全含有金のようにやく半ばを獲るにすぎず 残余は鉱尾として沈澱池に収めつつあったが この収金法が今後の大きな問題である

さらに同金山の最富鉱部に関する記述は 原文のまま記すと以下のようである。

“一昨年（明治36年）12月 第一坑道開鑿ノ際遭遇セシ富鉱部ハ稀有ノ良鉱ヲ出シ 四日間ノ採掘高鉱石十貫（37.5 kg）中ニ一貫九百八十二匁（7.432 kg）此価格九千七百十一円ノ製金ヲ得 其品位ハ實ニ十分ノニニ達セリト云フ。”

地質は 砂岩・粘板岩・輝緑凝灰岩・礫岩などよりなり これに珩岩が岩脈として貫いている。

鉱脈は 緻密質の砂岩・粘板岩の互層を貫く含金石英脈で 走向北5°東 南東へ20～30°傾斜し 岩層とほぼ走向・傾斜を等しくする いわゆる層状鉱脈である。

鉱脈は 第1坑道では坑口より80尺（約24m）において脈幅 1.8m程度となり 明治36年12月に前述の稀有の富鉱部に達した。この富鉱部は しばらくして衰え 脈幅も減少し1.5～0.6mとなったが この付近には自然金が多く付着し 含金量も多かったので その錘先は上中下の斜傾によって採掘された。またこの付近に存在した断層周辺には 本金山の特長として 含金量が比較的多いので むしろ断層のひんぱんな出現が歓迎された。

第2坑道は 第1坑道の直下21mの地点に掘さくされたが 坑内において錘幅5～6mに達する個所があった。本坑を錘押しで 約70m掘進した地点で 第1坑道引立付近の断層の下部延長が 北へ急斜して現われた。断層付近の鉱石は 例によって含金量が多い。

本金山の自然金の大部分は 砂岩・粘板岩を貫いた含金石英脈が のちに温泉のような熱水の作用によって形成されたもので 初生的な金成分を 石英脈と母岩の間 または石英脈の割れ目などに沈積したことは明らかである。……（文語文を口語文に 尺貫単位はメートル法でも表示した）

農商務技師理学博士鈴木敏：鹿折六黒見金山鉱床概査報文。
農商務省地質調査所 地質要報 第18巻 第1号 p.13～20
明治38年7月（1905）

また故渡辺万次郎博士の著書「金鉱及金鉱床」中の 中熱水性金鉱脈の項にも 鹿折金山に関し詳しく述べられている。

鈴木敏技師の報文中にある「徳永某」が 亡父徳永重康であるか否か定かではなく また発見された年月においても多少の相違がみられる。しかし多量の自然金が発見されたので この鉱山が一時高く評価されたためか 当時の日露戦争の戦費調達のため 同盟関係にあった英国に借款を求めつつあった政府当局は 1つの話題としてこの金山に関心を寄せたようである。当時日本銀行から この金塊を借用にこられたという話を 父から直接聞いたことがある。

いずれにせよ今は昔 すべては歴史の彼方に消え去って この金塊のみが私の手許に残った。

金にまつわる幾多の出来事 悲喜劇などは 人の世のあゆみとともに数限りなくあるが 北米大陸のアラスカ・ユーコンなどでは 今もおおそのあとを偲ぶことが出来る。人々が先を争って金塊探しに北へ走った そのすさまじさを表現するのに「スタンピード」という言葉が残っている位である。私もかつてその跡を訪ねる機会を得て 今も昔も変わらない 金の持つ魅惑的な魔性を思わずにはいられなかった。

“みちのくの黄金”については かなり多くの史実が残っているが 今はおおむね掘りつくされて かの平泉の金色堂にその名残りを留めているのみである。

わが国での このような黄金の発見の歴史の1つのエピソードとして またわが国で産した貴重な標本として 永遠に保存していただくため 地質調査所の筑波移転を機に新しく完成した地質標本館にこれを寄付することにした。“空前絶後”とはいわないまでも 再びわが国でこのような金塊が産出するかどうか 誰も保証はない。それだけにこの標本（重量 362g）が貴重なものであるという実感を強くするのである。

筑波に偉容を誇る新しい地質標本館が さらに内容の充実したものに発展するためにも これを機会に多くの方々の御協力が必要と思う。私の今回の寄付も その一石となればと思つてのことである。

取材については 山田正春地質相談所長に種々お世話になった。深謝する次第である。